

ミズキの池におけるいかだの利用状況について ～ 速報 ～

松田久司・小杉慶子・福岡秀美・山口博一・山崎 宏¹

はじめに

横浜自然観察の森にあるミズキの池は、谷あいをせき止めて作成された池である。このため岸は切り立ったところが多く、水鳥が休息できる水辺が少なかった。いかだを設置することは、水鳥に対して休息の場所を提供することが指摘(Coles 1975, BTCV 1981)されている。そこでミズキの池に、1990年12月22日に池の左側の1号いかだを、1994年3月27日に池の右側の2号いかだを、それぞれ設置した。

1号いかだの作成についてと、設置直後におけるカルガモ、アオサギ、およびカメの仲間の利用についての報告(古南 1993)がある。1996年5月から1997年4月までの生き物のいかだ利用状況を調査したので、速報としてここに報告する。

調査方法

ミズキの池の観察舎において、1996年5月から1997年4月まで、観察カードを設置し、一般来園者の方に、ミズキの池で観察された生き物といかだを利用している生き物の種類とその行動を、分かる範囲で記入していただいた。1日で複数の観察カードが記入されている場合は、1日の記録としてまとめた。

調査結果

観察カードに記入していただいた総日数は、146日であり、池で観察された生き物は、47種であった。生き物のいかだ利用が観察された総日数は、46日であり、いかだを利用した生き物は、9種であった。観察カードに記録された生き物の集計結果を、表1に示す。池を直接利用しているものと、周りの林を利用して観察されたものが、両方記録されている。いかだをどのように利用していたかについては、カルガモは、5月、7月、および1月には観察されていないが、ほぼ1年中観察され、いかだの上で休息していたり、いかだに生えた植物を採餌していた。またマガモ、オシドリ、アオサギ、とゴイサギは、いかだの上で休息していた。カワセミはいかだの上に設置したとまり木に、とまっていた。カメの仲間とウシガエルは、5月から8月にかけて、いかだの上で休んでいるのが観察された。

考 察

谷あいをせき止めて作成され、岸が切り立った池において、いかだを設置することによって、池を利用する生き物に休息と採餌の場所を、提供できると思われる。

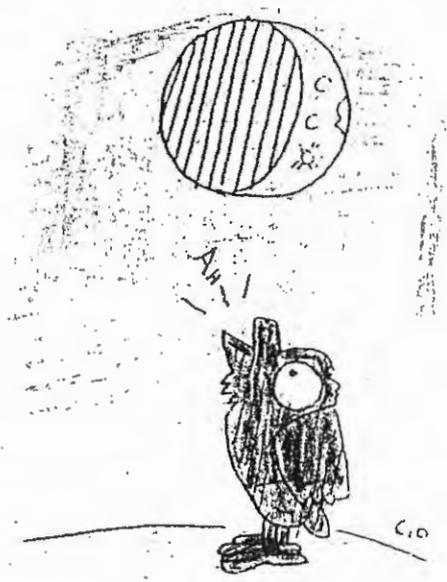
引用文献

- Coles Charles, 1975, Complete Book of Game Conservation. 2nd ed, Barrie & Jenkins, London, 307-311
BTCV (the British Trust for Conservation Volunteers), 1981, Waterways and Wellands A BTCV Practical Handbook. 2nd ed, Wembley Press, London, 94-99
古南幸弘, 1993, 自然実践 2017/9 水鳥のためのいかだを作る. 『N-T』-第7巻第4号(通巻75号), 50-51

¹ 横浜自然観察の森友の会 PJイカダイク

表1 池で観察された生き物

項番	生き物の名前	観察された日数	イカダを利用した日数
1	カワセミ	92	5
2	カルガモ	53	20
3	オシドリ	36	2
4	マガモ	18	2
5	アオサギ	16	9
6	ツバメ	16	
7	カメの仲間	10	9
8	カモの仲間	9	2
9	ジョウビタキ	8	
10	ウグイス	5	
11	ウソ	5	
12	コサギ	4	
13	キセキレイ	4	
14	ウシガエル	4	1
15	アカハラ	4	
16	キジ	3	
17	コジュケイ	3	
18	センダイムシクイ	3	
19	ヒヨドリ	3	
20	カケス	3	
21	コガモ	3	
22	アオジ	3	
23	ヘビの仲間	2	
24	ゴイサギ	2	
25	ヤブサメ	2	
26	サギの仲間	2	
27	スズメ	2	
28	カワラヒワ	2	
29	ゴイサギ	2	1
30	ハイタカ	2	
31	ツグミ	2	
32	ルリビタキ	2	
33	シロハラ	2	
34	モズ	2	
35	シメ	2	
36	カエルの仲間	1	
37	ムクドリ	1	
38	クロジ	1	
39	オオタカ	1	
40	トラツグミ	1	
41	アオゲラ	1	
42	コゲラ	1	
43	キジバト	1	
44	シジュウカラ	1	
45	ホオジロ	1	
46	トビ	1	
47	エナガ	1	
	合計	343	51



調 査 記 録



カマキリのいる環境

調査者：長谷川雅美（講師：千葉県中央博物館）

「身近な自然の変化を調べる」行事参加者，藤田薫まとめ

調査場所：モンキチョウの広場

調査日：11月3日

調査開始年：1997年 98年度予定：未定 終了予定： 年

調査方法：

カマキリを探し，種類，いた場所，その高さ，体長，性別を記録した。

結果：

カマキリは，計29頭見つかった。そのうちオオカマキリが19頭（オス3頭・メス16頭），ハラビロカマキリのメス5頭，コカマキリ5頭（オス2頭・メス3頭）であった。

体長は，オオカマキリのメスが最も大きく，次いで，オオカマキリのオス，ハラビロカマキリのメス，コカマキリのオス，メスの順であった（図1）。カマキリがいた場所は，コカマキリが地面や背丈の低い草の上，ハラビロカマキリがグミやアベリア等の低木や，スタジイ・トウネズミモチ等の高木の，1～1.5mの高さであった。オオカマキリは，低木にいることが多かったが，地面，草，低木，高木の0～1.5mの広い範囲で見つかった（図2）。

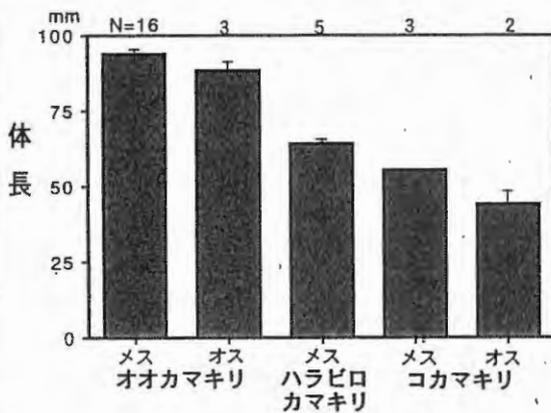


図1. カマキリ3種の体長

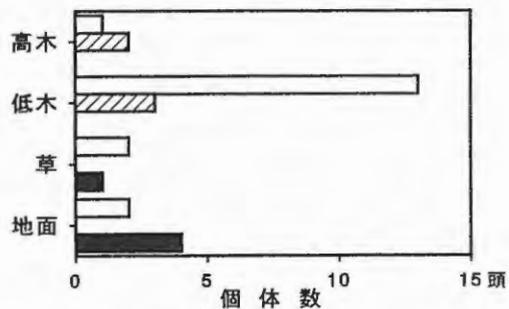


図2. それぞれのカマキリがいた場所

- オオカマキリ
- ▨ ハラビロカマキリ
- コカマキリ

ハチ宿の利用状況

調査者： 藤田 薫 (日本野鳥の会サンクチュアリセンター/横浜自然観察の森)

調査場所： 自然観察センター

調査日： 1998年3月3日

調査開始年：1997年

98年度予定：継続

終了予定：2000年

はじめに：1997年9月、主催行事「ジュニアレンジャーズスクール」で、ハチ宿が作成された。このハチ宿は、直径9mmと15mmの穴をドリルで開けた、直径8cm～32cm 長さ約50cmに切った丸太59本を積み重ねて作られた。このハチ宿の利用状況を調査した。

調査方法：ハチ宿の穴の直径と、その穴を使用している痕跡を記録した。

結果：

直径15mmの穴は166個、9mmの穴は59個であった。これらの穴のうち、泥がつめてある直径15mm穴が2個、草や木の皮がつめてある15mm穴が15個、9mm穴が2個であった。また、昆虫のフンがあった15mm穴が55個、9mm穴が12個、クモが隠れている15mm穴が1つあった。各々の直径穴の全個数に対する、利用されていた穴の割合を図1に示した。

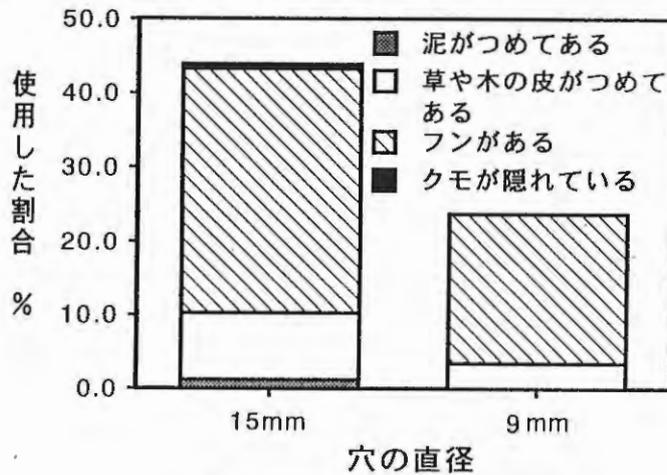


図1. ハチ宿の利用率

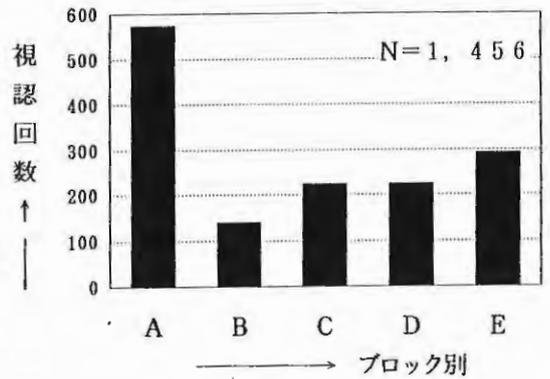
結果 :

(1) 翡翠のブロック別視認回数

みずきの池をA～Eの五つのブロックに分けて、どのブロックに翡翠が居るか調査した結果が図-1で有る。

一番翡翠が視認できたブロックはAブロックであるが、このブロックは止まり木であるため、観察者にとって翡翠を見たという印象が強いため、記録に残していることが影響していると思われる。

図-1 ブロック別視認回数グラフ



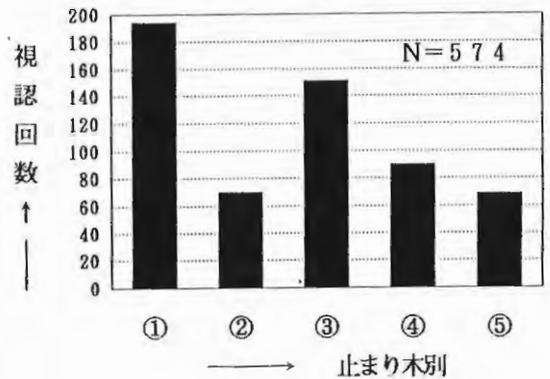
(2) 翡翠のとまり木別視認回数

A～Eの五つのブロックの内、Aブロックは Hyde 前とイカダに設置した止まり木で、この止まり木に止まった延べ回数 (N=574) の内、止まり木別の結果が図-2で有る。

①止まり木に止まることが最も多く、次に③の止まり木に止まっていた。

これは、①と③の止まり木が他の止まり木より大きく目立っているためと思われる。

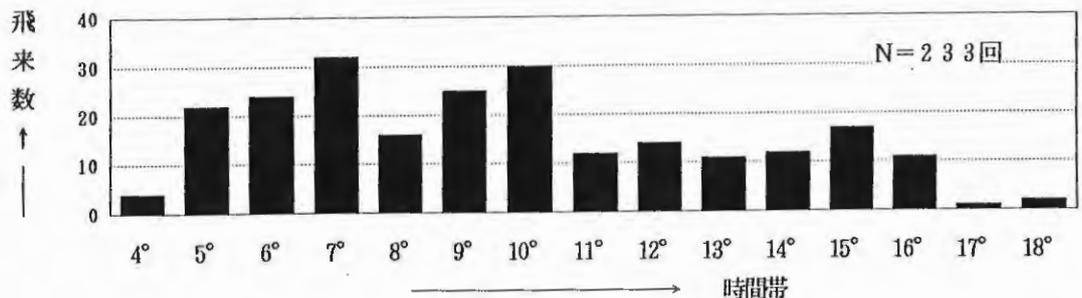
図-2 とまり木別視認回数グラフ



(3) 翡翠の時間帯別飛来数

- ① 午前と午後を比較すると、午前中の方が翡翠を見る機会が多いことが分かった。
- ② 5° 前と、17° 過ぎについては、観察頻度が少ないため、見る回数が極端に少なくなっていると思われる。
- ③ 4～6月の一番子の時期が今回の調査期間から外れているため、年間を通じての飛来回数は実質的にはもっと回数が多くなるとと思われる。

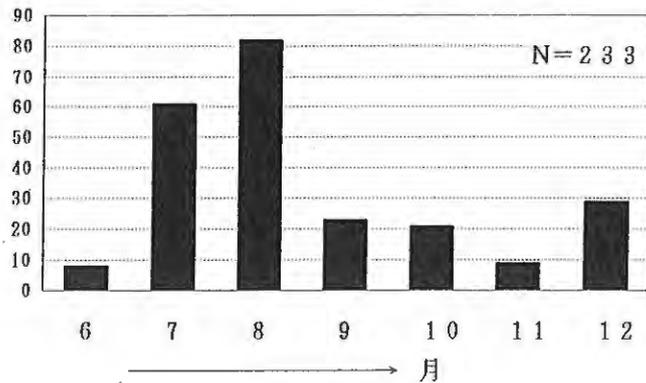
図-3 時間帯別飛来数グラフ



(4) 翡翠の月別飛来回数

図-4 月別飛来数グラフ

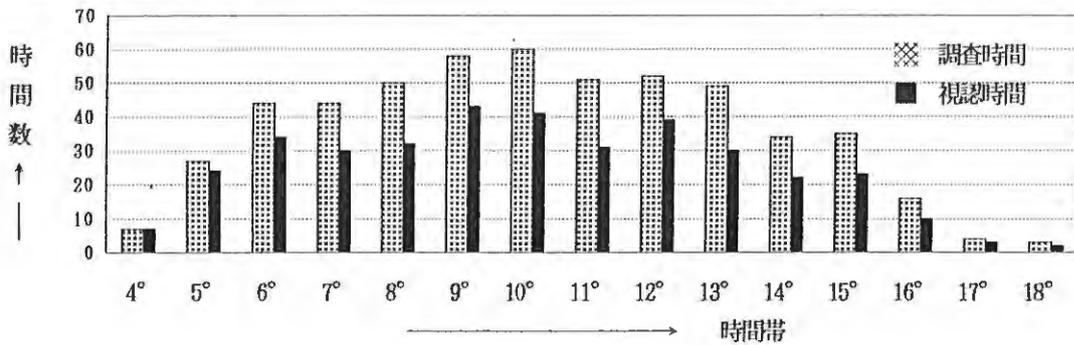
- ① 8月が最も多く飛来しているが、これは翡翠の2番子が、親子して飛来したものである。
- ② 12月が9~11月よりも飛来回数が多いが例年と違って、今年は12月中旬以降の飛来が多かった影響である。
- ③ また、6月はたったの2日しか観察していないためであり、実質的には7・8月並に飛来していると推測できる。



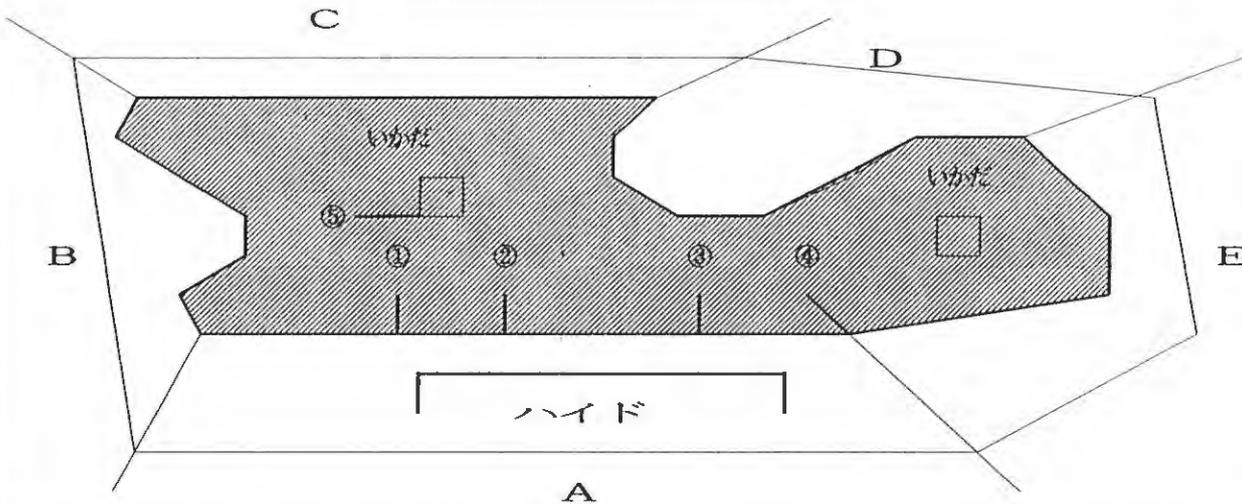
(5) 調査期間中の時間帯別視認度合い

- ① 1時間観察していけば平均的に7割の度合いで翡翠が見られたことが分かった。
- ② 実際には季節によって視認度合いが異なっているので、1年間を通じた月別時間帯の視認度合いを調査するため、1月以降も継続して調査していきたい。

図-5 視認度合いグラフ



みづきの池見取り図



参考にした本・文献 無し

調査にご協力いただいた多くの方々・並びにご指導いただいたレンジャーにお礼申し上げます。

川、池の生き物調査

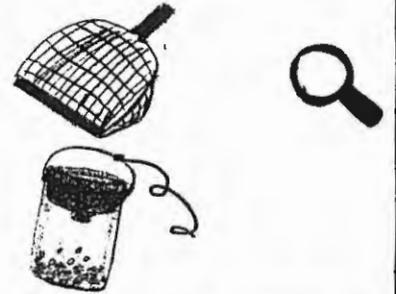
調査者： 橋本龍蔵，萩原洋平，松崎泰憲，中村純子
(生き物調査隊 (JRS, 後期のプロジェクト))

調査場所： いたち川の源流，みずぎの池，ホタルの池
下図詳細参照

調査日： 1997年11月8日
1997年12月13日
1998年1月10日 の計3回

調査開始年：1997年 98年度予定：(継続) 終了 終了予定：未定

調査方法：
・ 外観を目視する。
・ 網を使用して採取
・ 缶掛けを使用して採取

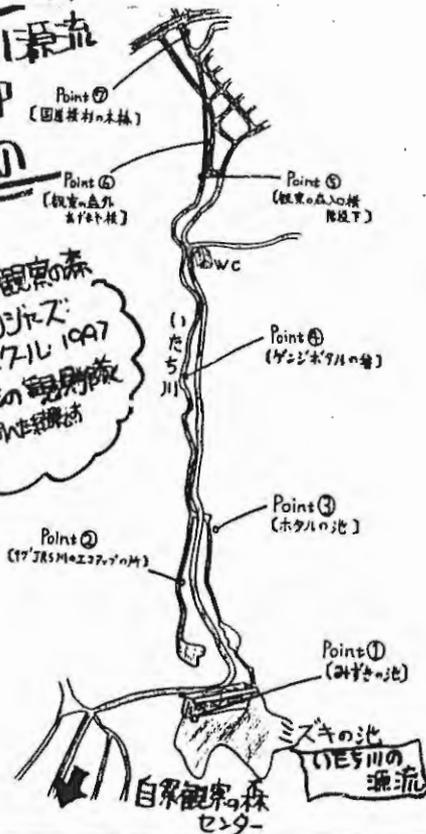


(ペットボトルを切り取って(おび)作製しました。)

調査した場所：

いたち川源流
の水中
の生き物

横浜自然観察の森
シニア・ジュニア
スタイル 1997
川の生き物の観察隊
竹園の森観察隊



編集注：「JRS」は、小学5～6年を対象にした、1年間メンバー制の行事。

結果：

日時 場所	97' 11月8日	97' 12月13日	98' 1月10日
ミズキの池 (人工の池)	アメンボ, 7チボソ, エビ(↑↑) (4匹)	5°C(水温) 7チボソ (6匹)	—
97' JRS 川のエアアップの所	—	12°C(水温) ヒル (30匹↑)	—
ホタルの池 (人工の池)	—	5°C(水温) エビ, ヤゴ, ゲンゴメ マツモムシ(2匹)	—
ゲンジホタルの谷 (自然状態の池)	エビ(↑↑) アメンボ アカガエル(冬眠中) ^{2匹}	10°C(水温) エビ(前回の卵)	0
観察の森入口横 (人工の池) 階段下	—	8°C(水温) エビ	—
観察の森外 (人工の池) あすや横	エビ(↑↑), アメンボ ザリガニ(2匹, 階段を2匹) カワニナ, ヤゴ	7°C(水温) エビ	0
国道横 木の橋 (コンクリートの川)	ユイ (4匹)	10°C(水温) アブラヤブ(5匹), ユイ(2匹)	0

考察：

- JRSの中での調査だったため 97'11月 97'12月 98'1月の3回しか行なえなかったため、一定した調査とはならなかった。
(1月の調査時は、前日の大雪のためには不可能な場所もあった)
- 今回は餌掛けを使用したが大抵の様な生き物がいるかという点では十分に活用できたと思う。
ただし 冬に行なったため水温が低いため生き物の種類によっては冬眠していたり水底でじっとしていたりするため、もっと暖かい時期の調査ならもっと多くの生き物が採取できたと思う。
- 子供と楽しみながらできたので良かった点も多いが、調査という観点から見ると、目的や方法も条件もよくない。今後はこれらをしっかり検討の上で調査を続けていきたいと思う。(友の会 AQUA にて)
(調査は 98'4月より続行中です)

<h2 style="margin: 0;">ごみ調査</h2>		
調査者： 山崎洋二郎 八島峰一 三浦彩 伊藤哲也 吉岡直子 (JRS ごみ調査班)		
調査場所： センター前・バス停・関谷見晴らし台・みずきの池 観察小屋・ 7ヶ所の丘		
調査日： 1997年11月8日 12月13日		
調査開始年： 1997年	98年度：終了	終了予定： 年
<p>調査目的 (JRS 参加者によるグループ活動。子供の発案から活動をする。) 森のごみをとることで人・森の生き物に迷惑なごみをなくして、 よい環境にしたい。そのためには広く呼びかけをしないとしない。 そのために実際にごみを調べてみよう。</p> <p>調査項目</p> <p>①ポイントごとにごみを拾い集め、種類、数を記録する。</p> <p>結果</p> <p>ポイント捨ての小さなごみが多い。利用者の利用目的に応じたごみがでていた。</p> <p>センター前・・・(11月のみ) タバコ3 プルトップ3 ストロ-1 7x3 クリバン1 ギンガミ5 かみ1 7x1 ビニール7 その他3</p> <p>バス停……………タバコ183・44 カシ5・2 7x34・0 ガム5・0 弁当箱3・0 (11月・12月) ギンガミ0・18 カップメン1・0 ビニール24・11 カミ34・12 テレカ0・1 発砲スチロール0・3 その他0・1</p> <p>関谷 ……………タバコ5・15 ライター0・1 カシ1・1 プルトップ0・2 ストロ-0・1 見晴らし台 カシケ-0・5 カシ0・5 7x6・0 ミカワ1・0 弁当箱2・3 ショウ入0・1 オギリ包装3・0 ティッシュ1・1 カミ0・1 プラスチックビニール0・2 瓶の破片0・1</p> <p>観察小屋……………タバコ2・2 まめ1・0 フィルムキャップ1・0 ワゴン1・0</p>		

編集注：「JRS」は、小学5～6年を対象にした、1年間メンバー制の行事。

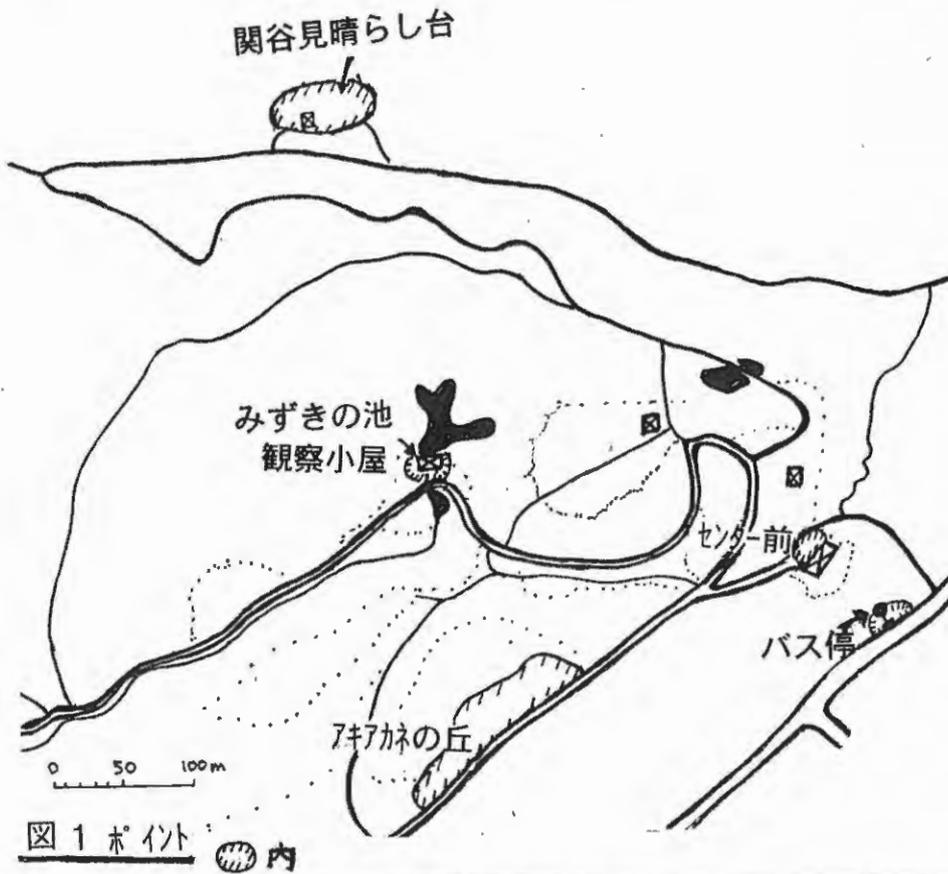
アキカネの丘・・・タバコ0・1 ペットボトル0・1 カケス14・0 弁当箱3・0
 ギンガミ0・2 ビニール 0・6 カミ0・2 その他8・0

考察

ごみを捨てるのは確信型と風に飛ばされるうっかり型があるようで、小さいごみは休憩場、バス停に集中。大きなごみは藪になか、植え込みのなかに多い。

各場所の使用用途が反映されたごみがおちていて、景色がよく、ベンチのある関谷見晴らし台とアキカネの丘ではお菓子、弁当にちなんだごみが多い。バス停は待ち時間を埋めるためのたばこやお菓子の屑ごみが多くあった。水木の池前では、たばこ、フィルムケースが出たものの他よりもごみの量は少ない。

以上のことを知ってもらうために、パネルをつくって観察の森のセンター内に展示した。



参考にした本・文献

拾ったゴミの総数は392個で、ワースト3は、タバコの吸い殻(123個, 31.4%), 菓子のかす(106個, 27.4%), 弁当がら(105個, 26.8%)であり、その他のゴミと比べて多かった。タバコの吸い殻は腐らないフィルターの部分が多く、また菓子のかすはキャンディの包み紙が多く、量的にたいしたことはなかった。弁当がらはビニール袋にまとめられたものも1個として集計したこともあり、量的には一番多かった。場所ごとの集計は行っていないが、休憩や食事を行う、モンキチョウの広場とウグイスの草地のそれぞれの東屋のまわりにゴミが集中していた。特にウグイスの草地の東屋のまわりのやぶのなかに弁当がらと飲み物の一部が多かった。これは、ウグイスの草地がモンキチョウの広場より通りがかる人が少ないために、人目に付かないように投げ込んだものが、草刈りされたり冬で草が枯れたりして、目に付きやすくなったものと思われる。東屋以外のトレールには、弁当がらはないものの、タバコの吸い殻と菓子のくずは少しづつ見られた。

拾ったゴミについて、紙のゴミは横浜観察の森の焼却器で焼却していただき、その他のゴミは参加者のかたに手分けして持ち帰っていただいた。この報告の場をかりて感謝したい。

横浜自然観察の森調査報告3(1997)

草地管理の生物への影響

調査者：藤田 薫(日本野鳥の会サッチャー/横浜自然観察の森)
 篠原由紀子・菊池邦俊・松田久司・河原 渉・
 河原好子・渋谷善広・高橋 剛・田中高明・田中真澄
 田中真紀・中塚隆雄 (横浜自然観察の森友の会)

調査場所：ピクニック広場

調査日：1997年8/30・31・9/27・28・10/25(クモ・バッタ・鳴く虫)
 10/15・16・17・25・26・11/2・9(人)
 1998年2/11(ノウサギ)

調査開始年：1997年

98年度予定：継続

終了予定：2000年

調査方法：

草地管理の影響を明らかにするため、草丈が3段階になるように草刈りを行った3つの広場で、人・鳴く虫・バッタ類・クモ・ノウサギなどの種類や個体数、利用方法などの違いを調べた。ノウサギ・人については、別途報告する。

草地管理のノウサギへの影響

調査者：藤田 薫(日本野鳥の会サッチャーセンター/横浜自然観察の森)
河原 渉・河原好子・菊池邦俊・渋谷善広・高橋 剛
田中高明・田中真澄・田中真希・中塚隆雄・松田久司
(横浜自然観察の森友の会)

調査場所：ピクニック広場

調査日：1998年2月11日

調査開始年：1998年

98年度予定：継続

終了予定：2001年

目的：

草丈の違いによる、ノウサギの草地利用の違いを明らかにし、ノウサギにとって良好な草地管理の資料とする。

調査方法：

草丈の異なる3つの広場で、それぞれ、2mおきに50cm×50cmの方形区を設け、その中にあるノウサギのフンを拾い、数えた。草丈は、最も低い広場で0～数cm、中位の広場で数十cm～1m、最も草丈の高い広場で1m～1m50cmくらいであった。

結果：

草丈が高い広場ほど、ノウサギのフンが多かった(図1)。また、草丈の高い広場では、広場全体にフンが多いのではなく、多量に集中している場所があるようであった(図2)。

これらのことから、ノウサギは、草丈の低い、見通しの良いところでは、走りながらフンをし、あまり長時間ゆっくりしない、また、草丈の高いところでは、身を隠して一カ所に落ちついて、フンをする、ということが推測された。

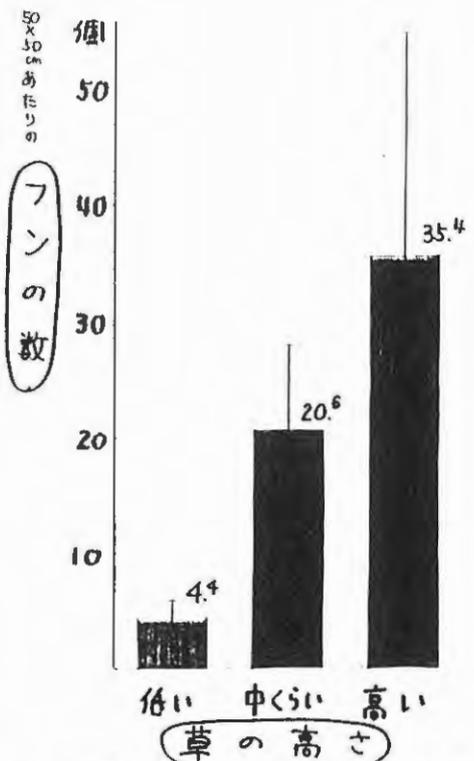


図1. 草丈の異なる草地におけるノウサギのフンの個数の違い

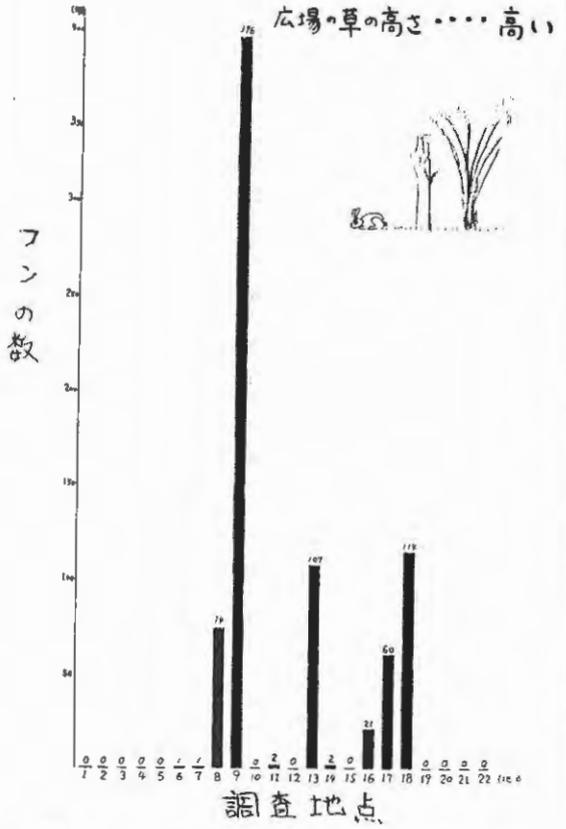
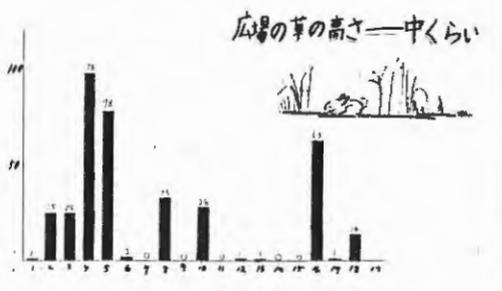
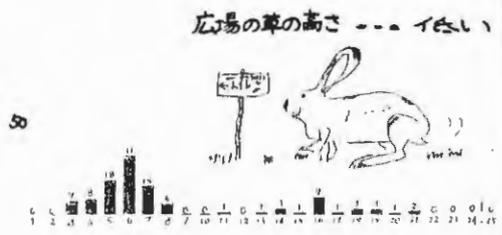
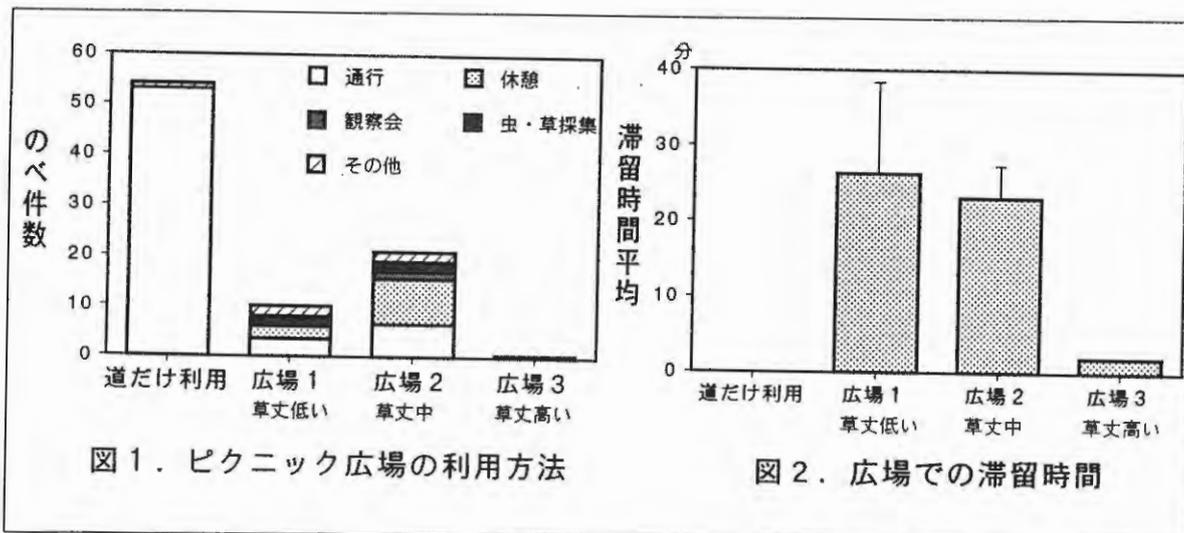


図2. 草丈の異なる草地におけるノウサギのフンの分布

謝辞:

調査の結果を展示にする際にお手伝いいただいた新倉房子さん、山口博一さんに、深謝します。

草丈の異なる広場の利用状況		
調査者：藤田 薫(日本野鳥の会サンチュアアリセンター/横浜自然観察の森)		
調査場所：ピクニック広場		
調査日：10/26・11/2・9		
調査開始年：1997年	98年度予定：終了	終了予定： 年
<p>調査方法：</p> <p>調査日の朝・昼・夕方の3回、各々1時間ずつ、人の利用した広場、利用方法、滞留時間を記録した。家族やグループで利用する場合、利用場所や利用方法、滞留時間は家族ごと、グループごとに同じである。そこで、1つのグループ・家族は、構成人数に関わらず1件として数え、集計の際には、利用者の頻度を、人数ではなく、件数でまとめた。個人または1つのグループが、2つの広場を利用した場合、または、2つの利用方法で利用した場合は、各々0.5件ずつの利用と数えた。滞留時間は、調査時間が1時間単位であったため、最高1時間の利用までを集計の対象とし、調査時間前後に利用を続けている場合も、調査時間内での利用時間だけを対象とした。この際、通行のみの利用については、対象としなかった。</p> <p>なお、この時期の草丈は、低い広場で0～数cm、中くらいの広場で約10cm～50cm、高い広場で1m～1.50mであった。</p> <p>結果：</p> <p>調査期間中、83件212人がピクニック広場を利用した。広場の中央を通る道だけを利用する場合が最も多く、続いて、草丈が中くらいの広場であり、草丈が高い広場は、ほとんど利用されなかった(図1)。利用の仕方は、通行や休憩が多く、休憩に区分した中では、昼食に利用されることが多かった。その他に区分した利用方法としては、人や犬との追いかけて、絵画などがあった。</p> <p>滞留時間は、草丈の高い広場で最も少なく、中くらいの広場と低い広場では、差はなかった(図2, Mann-Whitney's U-Test $U=44, A=48, z=0.12, P>0.05$)。調査時間を超えて広場を利用している場合、正確な滞留時間は測定できなかったが、2回の調査時間にまたがった長時間の利用が2件あった。この2件では、滞留時間それぞれ140分(草丈中くらいの広場で休憩)、171分(草丈低い広場で絵を描いていた)であり、どちらも、グループによる利用であった。</p>		



横浜自然観察の森調査報告3 (1997)

鳴く虫調査		
調査者：深田晋一（慶応大学院）・菊池邦俊（横浜自然観察の森友の会） その他友の会参加者 藤田 薫（日本野鳥の会サッチャー/横浜自然観察の森）まとめ 松田久司（横浜自然観察の森友の会）付記作成		
調査場所：ピクニック広場・タンポポの道15～終・モンキチョウの広場		
調査日：10月10日 18:00～19:30		
調査開始年：1997年	98年度予定：継続	終了予定：1998年
調査方法： 声または直接視認によって、生息している鳴く虫を確認した。		
調査結果： 確認できたのは、1.6種であった。		
ピクニック広場：アオマツムシ・カネタタキ・エンマコオロギ・カンタン・クサキリ・オナガササキリ・シバズ・マダラスズ・クチキコオロギ・ツユムシ・セスジツユムシ		
タンポポの道15～終：クマスズ・ヒゲシロスズ・ハラオカメコオロギ・モリオカメコオロギ		
モンキチョウの広場：ヤブキリ		

付 記 :

横浜観察の森のバッタ目

97/10/10 に藤田Rの呼び掛けで行われた、鳴く虫の自主勉強会（講師は慶応大学院の深田氏）で確認された虫たちに、横浜観察の森が発行した目録のバッタ目に記録されているものを加えて、平塚博物館から発行された「鳴く虫の特別展示資料」の解説をつけたものである。（項番を「鳴く虫の特別展示資料」に合わせてあります。なお、ヒシバッタ科を除いています。）

なお、備考の欄の記号は、◎：当日確認、○：当日確認できなかったが、容易に確認できると思われるもの、●：目録（'90と'97(調査報告2)）のバッタ目に記録されているもの、として記述している。

項番	種名	分布	生息環境	季節	解 説 (〈〉は深田氏のコメント)	備考
キリギリス科						
1	ツユムシ	平	湿地の草原	秋	(ビチビチまたはジジジと次第に強く)	◎
2	アシグロツユムシ	丘山	林縁	秋	(ジキまたはズチ)	●
3	セスジツユムシ	平丘	林縁・生垣	秋	チーチーからテンボが早まりジで終る	◎
4	エゾツユムシ	丘山	林縁・草原	夏	ツツツ・ツチツ・ツチ	●
7	サトクダマキモドキ	丘山	林の樹上・林縁	夏秋	(チ・チ・チと聞こえる小さい声)	●
8	ヤマクダマキモドキ	丘山	林の樹上・林縁	夏秋	(前種と同じ)	●
9	クツワムシ	平	林縁・やぶ	秋	ガチガチガチガチ…とやかましく	●
11	ハヤシノウマオイ	平丘山	林縁・林内	秋	ズィー…チとゆっくり	○
13	クビキリギリス	平丘	林縁・庭木	春	ジーーーーと強い連続音を長く続ける	○
14	シブイロカヤキリモドキ	平	草地	春	ジーーーーと前種よりややしゃがれた声	●
15	カヤキリ	南部	ススキ原	夏	ギーーーーと非常に強い連続音 〈声われている〉	○
16	ヒメクサキリ	丘山	草地	秋	ジーーーーとクビキリギリスより弱い連続音	●
17	クサキリ	平丘	草地	秋	前種と同じ 〈一本調子〉	◎
19	ホシササキリ	平	低い草地	秋	シリリ…と小さな声	○
20	オナガササキリ	丘	草地	秋	ズッ・ズッ・ズッ…	◎
21	ウスイロササキリ	平丘	湿った草地	夏秋	ジュルルル…と弱い連続音	○
29	コバネヒメギス	平丘山	草地	夏	チチチ・チチと小さな声	○
30	ヒメギス	平丘	湿った草地	夏	シリリと短めに	○
31	キリギリス	平丘	草地	夏	チョン・ギーーーー	○
32	ヤブキリ	平丘山	林内・林縁	夏	ジリジリジリ…と長く続ける 〈きちんと分類されていない、CDのものは関西系 (声がとぎれる)である。出現は8月いっぱい、 9月にはいなくなる。樹上性で、体は大きく、ヒメ も食べる。〉	◎
コロギス科						
33	ハネナシコロギス	丘山	林の樹上	春~秋	(足で小さな音を出す)	●
34	コロギス	丘山	林の樹上	夏秋	(足で小さな音を出す)	●
カマドウマ科						
35	カマドウマ	山	林床	夏秋	鳴かない	●
36	マダラカマドウマ	平丘山	家・洞窟等	夏秋	鳴かない	●
コオロギ科						
40	ツズレサセコオロギ	平丘	草地・畑	秋	リュー・リュー…リューと長く続ける	○

45	モリオカメコオロギ	丘山	林床	秋	リーッ・リッ・リッと前種よりややゆっくり 〈ハラオカメより、声がにごって、ゆっくり〉	◎
46	ハラオカメコオロギ	平丘	草地・畑	秋	リッリッリッと4~5音づつ 〈声がすんでいる〉	◎
48	ミツカドコオロギ	平丘	草地・荒地	秋	リッリッリッとハラオカメより強い声	○
51	エンマコオロギ	平丘	草地・畑	秋	クリクリリューーリューーリューー	◎
53	クマスズムシ	平丘	草地	秋	ウイーーンと高音を長く続ける	◎
54	クチキコオロギ	南部	林内枯木等	秋~春	グリーーイと一声づつ	◎
56	アオマツムシ	市街地	街路樹・庭木	秋	リューリューリューー	◎
59	カンタン	平丘山	林縁・やぶ	秋	ルルルと長く続ける 〈クズ、オア、クワ、ワギで、よく鳴いている〉	◎
61	クサヒバリ	平丘	林縁・やぶ	秋	フィリリリ…と細い連続音 〈ハスのはっきりして、たたいているみたい〉	●
72	ヒゲシロズ	平丘	土堤草地	秋	フィリリリ…とクサヒバリよりやや弱い声 〈トビ印〉	◎
62	キンヒバリ	平	湿地	初夏	リイリリリリと始めつかかかのように	○
63	カヤヒバリ	南部	ススキ原	初夏	ジリー・ジリーと断続的に	●
66	ウスグモズ	平	家近くの樹上	秋	鳴かない	●
69	ヒメズ	丘	林床	秋	ズー・ズーと鈍く間をおいた声	●
70	マダラスズ	平丘山	草地	夏秋	ジー・ジー・ジーと規則的に区切る 〈リズミカ〉	◎
73	シバズ	平丘	芝地	夏秋	ジー・ジー・ジーと不規則な断続音 〈とぎれめがわからない〉	◎
カンネタタキ科						
75	カネタタキ	平丘	林縁・やぶ	秋	チャチャチャと金属音	◎
ケラ科						
79	ケラ	平	水田・湿地	春~秋	ブーという低い連続音	○
ノミバツタ科						
80	ノミバツタ	平	草地	春~秋	鳴かない	●
オンバツタ科						
81	オンバツタ	平丘	草地	夏秋	鳴かない	○
イナゴ科						
83	コバネイナゴ	平丘	水田・湿地	秋	鳴かない	○
84	ツチイナゴ	平丘	草地	晩秋 春	鳴かない	○
85	ヤマトフキバツタ	平丘	林縁・林床	夏	鳴かない	●
86	タンザワフキバツタ	平丘山	林縁・林床	夏	鳴かない	●
バツタ科						
90	ショウリョウバツタ	平丘	草地	秋	飛ぶ時に翅で(?)で、チチチ…と音を出す	○
91	ショウリョウバツタモドキ	平	土堤草地	秋	鳴かない	○
92	トノサバツタ	平丘	草地	秋	後足と翅で、シカシカ…と弱い音	○
93	クルマバツタモドキ	平丘	草地	秋	?	○
94	クルマバツタ	丘	草地	秋	?	○
95	イボバツタ	平丘	荒地	夏秋	?	●
97	マダラバツタ	平	川・海の草地	夏秋	?	●
101	ナキイナゴ	平丘山	草地	夏	後足と翅でシキシキ…という連続音	●

ゲンジボタル・ヘイケボタルの成虫の発生個体数調査		
<p>調査者：東陽一¹・金子知也²・木本裕司²・楠至²・桑原一徳² (1:日本野鳥の会サンクチュアリセンター・横浜自然観察の森 2:日本大学生物資源科学部)</p>		
<p>調査場所：長倉町小川アメニティ→いたち川→コナラの谷→ゲンジボタルの谷→ミズスマシの池→ミズキの谷→ヘイケボタルの湿地</p>		
<p>調査日：1997年5月26日～7月25日の間、原則として2日おき。19時30分に開始し、21時までに終了。</p>		
調査開始年：1986年	98年度予定：継続	終了予定：未定
<p>目的：ゲンジボタル・ヘイケボタルの成虫の発生数と生息状況を把握する。</p> <p>調査方法：</p> <p>1. 成虫の発生個体数 ゲンジボタル、ヘイケボタルの生息地内に設定した調査コースを時速1.5～2.0kmで歩き、その間に発光したゲンジボタル、ヘイケボタルの成虫の個体数を記録した。</p> <p>2. 生息場所の調査 発光した成虫を確認した地点を地図上に記録し、発光位置を f：飛行 a：高木 b：低木 c：草本 に分けて記録した。</p> <p>3. 気象条件 天候・風力・気温・水温を記録した。風力の記録はビューホルトの風力階級を用いた。気温は調査コース上に設定した6地点で、水温は調査コース上のいたち川・ゲンジボタルの谷・ヘイケボタルの湿地に設定した7地点で測定、記録した。</p> <p>ゲンジボタルの成虫の生存期間は平均するとオスが3.6日、メスが2.5日である(大場 1988)ので、原則として調査は2日おきに行った。荒天時はその翌日に実施した。</p>		

結 果：

ゲンジボタルの初認日は5月29日で、終認日は7月16日であった。最も多く確認されたのは6月10日で59頭であった（図1）。確認個体数の合計は350頭で、前年の確認個体数（357頭）とほぼ同じであった（東 1997）。ヘイケボタルの初認日は6月7日であった（図1）。調査は7月25日に終了したが、その時点でヘイケボタルはまだ確認されていたので、終認日は不明である。確認個体数の合計は1149頭であった。

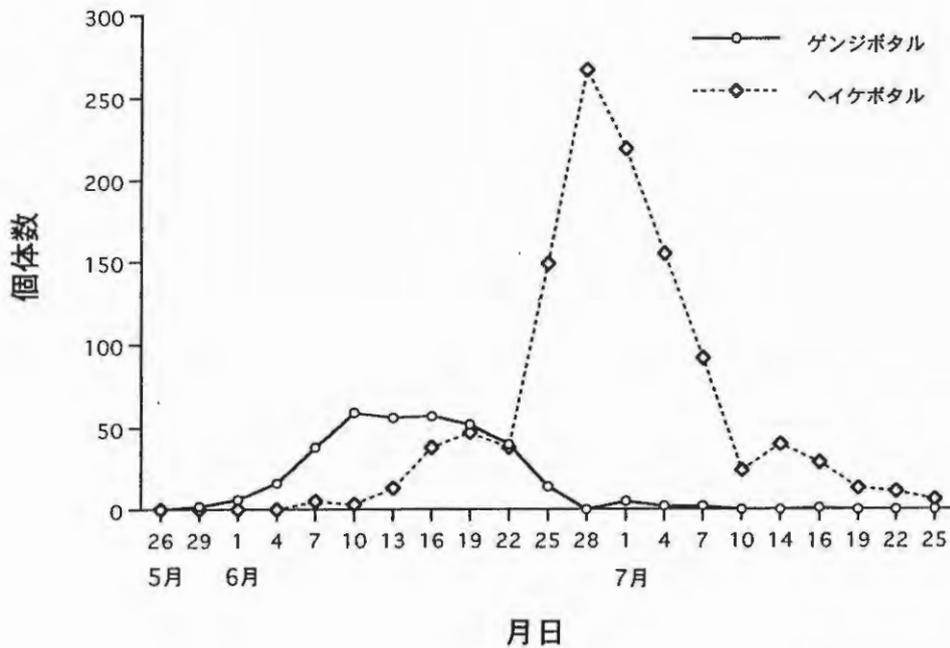


図1. 横浜自然観察の森におけるゲンジボタルとヘイケボタルの発生個体数変化

参考にした本・文献：

東陽一. 1997. ゲンジボタル・ヘイケボタルの成虫個体数調査. 横浜自然観察の森調査報告2

大場信義. 1988. 日本の昆虫12 ゲンジボタル. 文一総合出版

環境ボランティアセミナー「ホタルの自然史」報告

調査者： 林英子¹・後藤好正²・東陽³・セミナー参加者22名
 (1：日本野鳥の会・サンクチュアリセンター/東京港野鳥公園
 2：横浜ホタルの会 3：日本野鳥の会・サンクチュアリセンター/横浜自然観察の森)

調査場所： いたち川・コナラの谷・ゲンジボタルの谷・ミズキの谷

調査日： 1997年6月14日 16時～20時

調査開始年： 〃 年	98年度予定： 継続・ 終了	終了予定： 〃 年
------------	-----------------------	-----------

調査方法：

■セミナー前半は後藤氏がホタルの生態などについて解説をし、後半から調査実習としてゲンジボタルの谷において、ホタルの個体数調査を実施した。

■いたち川・コナラの谷・ゲンジボタルの谷・ミズキの谷の環境をタイプ別に5区域に区分し、グループ分けした参加者が各区域を時速1.5～2kmで歩き、発光した成虫を確認した地点と数を地図上に記録した。

調査時間はホタルの個体数が多い時間帯を選び、19:50～20:00の間とした。調査区域は以下の通りである。

A区：自然河川（いたち川：50m）

B区：人工河川（コナラの谷：50m）

C区：湿地1（ゲンジボタルの谷）

D区：三面護岸河川（いたち川：50m）

E区：湿地2（ミズキの池）

結 果：

ゲンジボタルの個体数はC区のゲンジボタルの谷でもっとも多く、ついでA区の自然河川が多かった。もっとも個体数が少なかったのはD区の三面護岸河川で、個体を確認することはできなかった。C区は調査者により記録個体数にばらつきがあったが、平均して約35個体程度であると思われる。B区ではゲンジボタル以外にクロマドボタルを8個体確認した。

表1. 調査区域別ゲンジボタル個体数

区域	個体数
A区：自然河川（いたち川）	16-18
B区：人工河川（コナラの谷）	1
C区：湿地1（ゲンジボタルの谷）	27-57
D区：三面護岸河川（いたち川）	0
E区：湿地2（ミズキの池）	15

参考にした本・文献

古南幸弘. 1995. 横浜自然観察の森におけるゲンジボタル野外個体群の動態. 横浜自然観察の森調査報告1:1-4.

水鳥の池におけるゲンジボタルの生息確認

調査者：東陽一・今永正文・林英子（日本野鳥の会サウチユアリセンター）

調査場所：水鳥の池

調査日：1997年6月17日

調査開始年：1997年

98年度予定：終了

終了予定：1997年

目的：これまで水鳥の池ではゲンジボタル、ハイケボタルの生息は確認されていない。生息の有無を確認するために調査を行った。

調査内容：調査日の夜19時30分頃から20時30分頃まで水鳥の池を踏査し、ゲンジボタル、ハイケボタルの成虫の生息の有無を調べた。

結 果：

20時10分にゲンジボタル2頭が発光しながら飛んでいるのを確認した。これは水鳥の池におけるゲンジボタルの初確認であるが、これまでに水鳥の池における生息状況調査はほとんど行われていなかったため、以前から生息していた可能性がある。

ウスバカゲロウ幼虫の巣穴の数とそこに落ちる食物の季節変化

調査者： 藤田剛 (東京大学 野生動物学研究室)

調査場所： カシの森, コナラの林

調査日： 1997年4月2日, 12日, 8月28日, 9月4日, 1月14日

調査開始年： 1995年

98年度予定： 継続・終了

終了予定： 1999年

調査方法：

春, 晩夏, そして冬に, 以下の方法で 1) 巣穴の数, 2) 巣穴の直径, 3) 巣穴に落ちる動物の種類を調べた.

1. 巣穴の数

カシの森とコナラの林の観察路 (調査範囲は 1995 年度と同じ) を歩き, 道端にあるウスバカゲロウ幼虫がつくった巣穴の数と位置を記録した.

2. 巣穴の直径

1 の調査で確認した巣穴の長径と短径をデバイダーとノギスを使って 0.1mm 単位で記録した.

3. 巣穴に落ちた動物

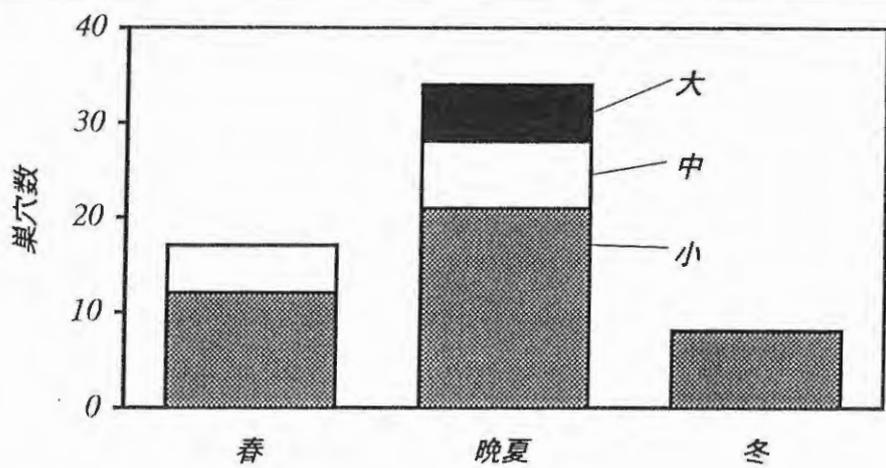
各巣穴に落ちていた動物の種類と大きさ (1mm 単位)を記録した.

結果：

1. 巣穴数の季節変化

調査地内で一番大きな裸地にあった巣穴の数を季節別に図示した. 巣穴数は調査した季節の中では晩夏にもっとも多く, 冬に少なかった.

大きな巣穴 (長径が 10.0mm より大) は晩夏にしか認められず, 冬はすべて小さな巣穴 (5.0mm 以下) だった. 厳密な解析はしていないが, 他の裸地でもほぼ同様の傾向があると思われる.



ウスバカゲロウ幼虫の巣穴数の季節変化。大は巣穴の長径が10mmより大、中は5mmより大で10mm以下、小は5mm以下。

2. 巣穴に落ちた動物

昆虫などが巣穴に落ちているのを確認できた例数は少なく、春は124巣調べて2例(1巣あたり0.016頭)、晩夏は277巣調べて7例(1巣あたり0.025頭)、冬は75巣調べて1頭も見つからなかった。

その種類は体長2-5mmのアリ類がほとんどを占め8例で、残り1例は体長3mmのヤスデ類であった。また、獲物が落ちていた巣穴の大きさは、春が2例とも中程度(長径5.1-10.0mm)で、晩夏はすべて大きなものだった。

横浜自然観察の森調査報告3(1997)

植物に集まる動物調査

調査者：藤田 薫(日本野鳥の会サッチャーセンター/横浜自然観察の森)

調査場所：コナラの林・ウグイスの草地

調査日：1997年3月中旬～4月末

調査開始年：1996年

98年度予定：継続

終了予定：1999年

調査方法：

1. キブシの送粉者を明らかにするため、花に異なったメッシュサイズの網をかぶせ、結実率を調べた。また、週に2回、朝・昼・夕・夜に、キブシの訪花昆虫を採集した。来年度以降、これらの昆虫の同定を行う予定。
2. 週に1回、キブシとサクラの開花率の季節変化と花数を調べ、週に2回、これらの花で吸蜜している鳥の種類と個体数を調査した。

体験学習実施校へのアンケート調査

調査者：小杉慶子（横浜自然観察の森友の会）
今永正文（日本野鳥の会サウチアリアクター／横浜自然観察の森）

調査場所：横浜自然観察の森

調査日：1997年12月／アンケート送付・回収
1998年1～3月／アンケート分析・まとめ

調査開始年：1997年	来年度予定：終了	終了予定：
-------------	----------	-------

はじめに：

横浜市教育委員会は、横浜市体験学習開催委員会を主体とし、「自然との触れ合い、地域との触れ合い、児童同士の交流、心身の健全な育成」等を目的に、市内数ヶ所の野外施設で、小学校4年生及び5年生の1学年を対象とした1泊2日の「体験学習」を行うことを奨励している。

この「体験学習」のすすめにそって、今年度横浜自然観察の森に隣接する「上郷・森の家」には年間55校の学校が宿泊し、そのほとんどが当施設をなんらかの形で利用している。

これまで横浜自然観察の森では、この体験学習実施校に対して“教師へのプログラム相談”や“自然観察マップなどの資料提供”“10-30分のミニ・レクチャー”などの対応を行ってきており、今年度も引き続きサービスの提供に取り組んできた。また、新たに“指導員（体験学習ボランティア）の紹介”や“教員向け研修プログラム企画・実施”“団体対応向け自然観察オリエンテーリングの開発”などを行い、サービスの向上に努めている。

そこで、今年度、当施設を利用した体験学習実施校を対象に、“全体的な利用状況”や“サービスへの満足度”を明らかにし、“今後の方向性”を探ることを目的としたのが、今回のアンケート調査である。併せて、各校の環境教育についての簡単な意識調査も行った。

調査方法：

今年度、横浜自然観察の森を利用した全ての体験学習実施校の担当各位に、一括して昨年12月質問紙を送付し、回収した。53校中、43校から回答があり、回収率は81.1%だった。

質問の内容は、「体験学習」「横浜自然観察の森」「環境教育」の3つに大別され、体験学習については「目的・協力者に希望する役割」の2項目、横浜自然観察の森については「認知度・利用したサービス・満足度・希望するサービス」の4項目、そして環境教育については「取り組みの有無・実施例・環境教育をすすめていくための必要条件」の3項目で、併せて9項目について質問した。また、質問方法は回答のための選択肢があらかじめ用意されている限定回答型を採用した。

結果：

1. 「体験学習」について

1-1. 体験学習の目的 (fig. 1)

「体験学習を通じて児童に学んでほしいこと」（最も重要なもの1つを選択）として62%の教師が「自主的に行動すること」を挙げた。ついて

「自然と触れあうこと」(24%)、「集団行動のルール」(7%)、「友人との楽しい思い出」(7%)となった。

1-2. 協力者に期待する役割 (fig. 2)

「学校外の人に協力を期待する役割」(2つ選択)としては、「野外炊事の手伝い」(22件)が最も多く、「自然観察プログラムの実施」(21件)が続く。以下「子供との交流」(15件)、「先生の補助」(11件)、「レクレーション・交流ゲームの実施」(10件)であった。

2. 「横浜自然観察の森」について

2-1. 施設の認知度 (fig. 3)

「体験学習以前に横浜自然観察の森をご存知でしたか」という質問に対して、「知らなかった」が22%であるのに対し、「来たことがある」(34%)、「どのような施設か知っていた」(24%)、「名前は聞いたことがあった」(20%)を併せると、以前からその存在を知っていたのは約8割(78%)であった。

2-2. 利用したサービス (fig. 4)

「サービスの利用の有無」については、「利用した」と答えたのは、総回答数43件のうち40件(93%)であった。「どのようなサービスを利用しましたか」(複数回答)で最も多かったのは「自然観察マップなど資料の活用」(36件)で、サービスを利用した学校の9割が資料の活用を行っている。続いて「10-30分のミニレクチャー」(17件)、「館内展示の見学」(16件)、「プログラム相談」(14件)、「オリエンテーリングの利用」(10件)、「スライド・ビデオ上映」(2件)の順となった。

2-3. サービスに対する満足度 (fig. 5)

4段階評価でサービスに対する評価を見ると、最も高い評価4が19件(48.7%)で、続いて順に評価3.5が2件(5.1%)、評価3が17件(43.6%)、評価2が1件(2.7%)であった(無回答が4件)。

2-4. 希望するサービス (fig. 6)

「今後どのようなサービスを期待しますか」(上位3つ選択)との問いに対して、最も多かったのは「自然観察マップなどの資料の提供」(26件)で、ついで「自然観察の指導」(21件)、「プログラム相談」(19件)、「10-30分のレクチャー」(18件)、「オリエンテーリングの利用」(14件)、「自然体験プログラムの企画・実施」(12件)、「スライド・ビデオ上映」(7件)、「館内展示の見学」(7件)となっている。

3. 「環境教育」について

3-1. 環境教育の実施の有無/実施例 (fig. 7)

「環境教育をこれまで行ったことがあるか」との問いに対して、「ある」が63%、「行ったことはないが、これから取り組んでみたい」が26%、「行ったことはない」が9%であった(無回答は4件2%)。実施したところのある学校へ、その具体的な活動事例を自由記述式で聞き、傾向に沿ってまとめたところ、花壇の整備などの緑化運動(11件)やリサイクル活動(10件)が多く、以下、校内の美化(6件)、授業の単位との関連(6件)が続いた。その他では、ゴミの減量化(4件)、水問題(4件)、自然観察(4件)、土作り(2件)、環境新聞等の情報発信(2件)、省資源(1件)、草取り(1件)があがった。

3-2. 環境教育をすすめるための必要条件 (fig. 8)

「学校で環境教育をすすめる上で必要と思われるもの」(3つ選択)では、「時間的余裕」が32件と最も高く、続いて「カリキュラムの再編成」が27件、以下「地域や家庭の協力」(22件)、「専門家の学校教育への参加」(17件)、「教員に対する研修や研究会の実施」(11件)、「専門家による相談機関の設置」(7件)、「教科書や指導書の充実」(5件)、「職場の理解」(1件)という結果が得られた。

考察：

■項目

1. 「体験学習」について

1-1. 「体験学習の目的」について

6割以上の学校が、体験学習において“児童が主体的に行動すること”を最も重要な目的として掲げており、4校に1校の割合で「自然と触れあう」機会を与えるものとして体験学習を捉えていることが分かった。

1-2. 「協力者に期待する役割」について

「野外炊事の手伝い」は、火や刃物を扱うため、従来より期待されてきた主な役割の一つと考えられる。

協力者の主体的な関わりが期待される「自然体験プログラムの実施」と「レクリエーションゲームの実施」を比較すると、「自然体験プログラムの実施」を挙げた学校が全体の半数近くを占めたのに対し、「レクリエーションゲームの実施」を挙げた学校は10校と少なかつた。児童に自然と触れ合う機会を与えたいと考える学校が多い一方で、自然プログラムの企画は実施する自然環境に活動内容が左右されることも多く、下見を行うなどが十分な準備の必要性が考えられる。そのため、学校外の協力者への期待が大きいことがうかがえる。

今後、体験学習の協力者となる候補者が自然体験プログラムを行えるスキルを身につける機会を設けることが期待される。

2. 「横浜自然観察の森」について

2-1. 「施設の認知度」について

施設の存在を以前から知っていたとする回答が全体の約8割を占めたが、「来たことがある」「どのような施設か知っていた」は全体の6割であった。自然観察の森に隣接している宿泊施設に宿泊する学校のほとんどが自然観察の森を主な活動の場として利用しているため、自然観察の森の立地条件やサービス内容を知った上で、横浜自然観察の森を体験学習の活動の場として選択していると予想されたが、必ずしもそうではないことがわかった。

2-3. 「サービスに対する満足度」について

評価3～4と回答した学校が9割強を占め、既存のサービスに対する満足度はうかがわれる。

2-4. 「希望するサービス」について

「スライド・ビデオ上映」や「館内展示の見学」など、室内でのサービスより、「自然観察の指導」「オリエンテーリング」「自然プログラム」など、自然と直接触れあう機会を得るためのサービスに期待が大きいことが分かった。

従来、あまり取り組まれてこなかつた「自然観察の指導」「オリエンテーリングの利用」「自然体験プログラムの企画実施」の3項目を比較すると、「自然観察の指導」は全体の半数近くの学校が挙げているが、「オリエンテーリングの利用」「自然体験プログラムの企画実施」に対する期待は自然と直接触れあう機会を与えるサービスの中で最も低かつた。自然と触れあうことを目的とした3つの活動で、このような差があらわれた背景に何があるのか、今回の調査では調べられなかつた。しかし、それぞれの活動の性格を考えると、オリエンテーリングと自然体験プログラムはいずれも、児童が主体的に行動する活動である一方で、児童の掌握や成果の明確化が自然観察にくらべ難しい傾向があるようにおもわれ、また、入念な準備が必要となる。自然観察は従来からひろく行われている方法である。自然に触れ合う機会として、よりなじみが深く、簡単に体験できる方法を学校側が望んでいると見ることもできる。

3. 「環境教育」について

3-1. 「環境教育の実施の有無と実施例」について

「事業の単元と関連して」が6件あったが、その内容からゴミ問題や水問題は社会科や理科の授業の一貫として、あるいはそれをきっかけに行われていることもあるようである。

これに対し、自然観察(4件)、土作り(2件)など、児童に直接自然とふれあう機会を与えるものは相対的に少なかった。

学校では自然体験活動より、生活環境を題材にした環境教育が重要視されているようである。そのため、自然環境が比較的思われている自然観察の森において子供達に自然体験の機会を与えたいとの期待が高まっているのかも知れない。

3-2. 「環境教育をすすめるための必要条件」について

「職場の理解」が最も少ない結果になったということは、学校内に“環境教育”という語彙が浸透してきており、「学校で環境教育を行う」ことへの理解が高まってきていることが予想される。

一方で「時間的余裕」「カリキュラムの再編成」の回答が多かったことから、制度的には教育環境が整っていないと考えている教師が多いことが分かる。

また、「専門家の学校教育への参加」「教師に対する研修・研究会の実施」の必要性を挙げている教師も多く、実際にどのような環境教育を行ったらよいのかと戸惑っていること、指導書などの活字からの情報ではなく、教師自身が実践的に学べる機会を求めていることが分かる。

■全体

今回のアンケート調査は、自然観察の森における団体対応サービスの開発と提供の方向性を探るため、体験学習におけるサービスの利用状況や学校での環境教育に関する全体像を把握することを目的とした。学校の視点から環境教育に対する意識や自然観察の森のサービスについての調査は行われたことはこれまでに行われたことがない。今回の調査で、これらに関する予備的なデータが得ることができた。

学校での環境教育への理解も高まり、多く学校が環境教育に取り組んでいる、あるいは取り組もうとしていることが分かった。実践例としては、日常生活に関する内容が多く行われている一方で、児童に自然体験をさせる活動があまり行われていないようである。そのため、自然環境の豊かな場で行われる体験学習において、児童に自然と触れあう機会を与えたいとの思いが強いようである。

環境教育を行う上での実践的ノウハウを教師自身が学びたいとの要望が多く聞かれた。また、学校教育への専門家の参加も期待されていた。特に体験学習では児童に自然体験をさせるためのプログラム提供や指導を横浜自然観察の森のサービスや学校外の協力者に求めていることが分かった。以上のことから、自然観察の森では、今後、児童が自然に触れ合う活動を行うためのサービスの開発や提供を積極的に行っていく必要があるであろう。その中でも、自然観察の指導が強く求められており、自然観察を行う助けとなる資料やプログラムの開発と提供が必要とされている。また、子供達が自然と主体的に関われる活動が手軽に行なえるような自然体験プログラムの開発や提供を積極的に行っていく必要がある。

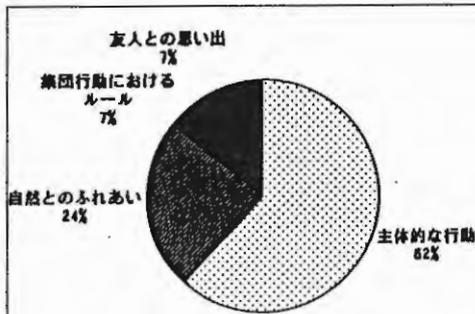


図1-1 児童に学んでほしいこと(fig. 1)

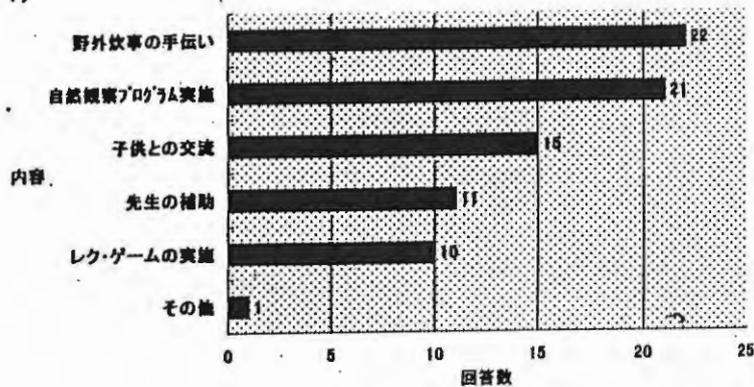


図1-2 学校外の人に期待する役割(fig. 2)

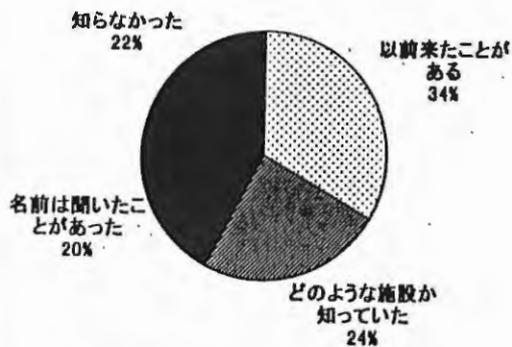


図2-1 横浜自然観察の森の認知度(fig. 3)

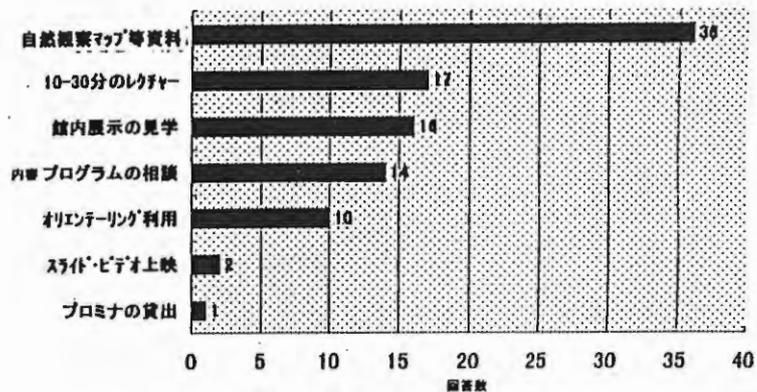


図2-2 利用したサービス(fig. 4)

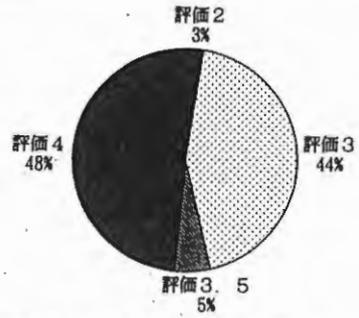


図2-3 サービスに対する満足度(fig. 5)

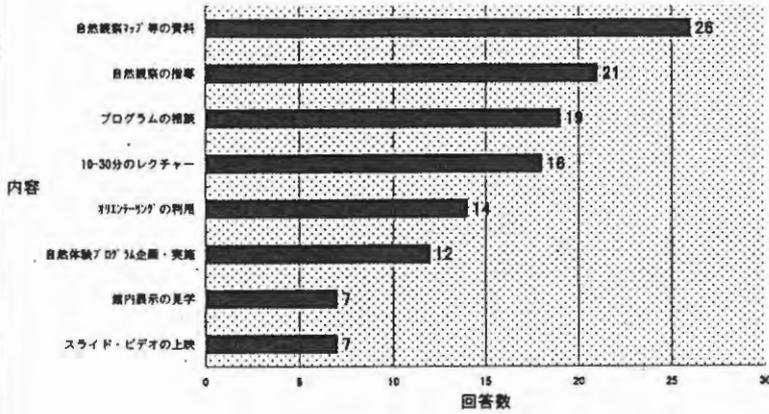


図2-4 今後期待するサービス(fig. 6)

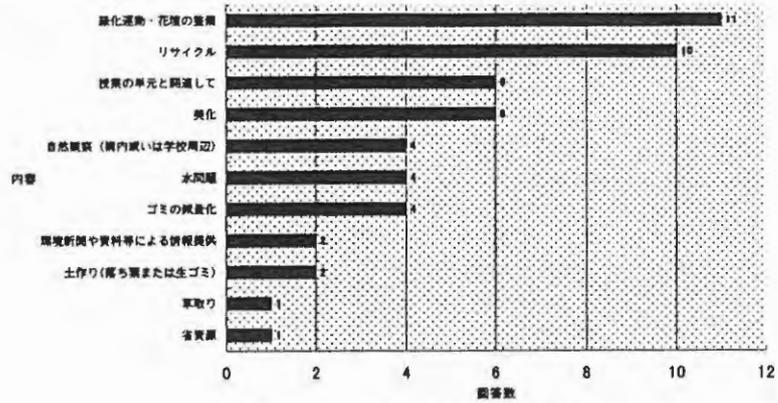


図3-1b 学校で行った環境教育の事例(fig. 7)

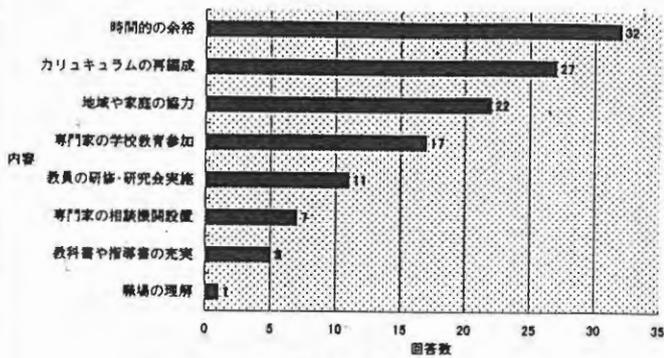


図3-2 学校での環境教育に必要なこと(fig. 8)

横浜自然観察の森友の会基礎データ調査		
調査者：今永正文(日本野鳥の会サントリーセンター横浜自然観察の森) 中田利夫(フォレスト・ワーク代表)		
調査場所：横浜自然観察の森		
調査期間：1997年4月～1998年3月		
調査開始：1997年	来年度予定：継続	終了予定：2001年
<p>はじめに：</p> <p>横浜自然観察の森では、施設のボランティア・グループ「横浜自然観察の森友の会」が活動し、98年度で10周年を迎える。そこで、今回の調査では「地域で活動できる環境保全ボランティアを育成する」とした施設の事業目的にのっとり、今後長・中期目標を達成するための施設の運営体制を整備し、ボランティアがより快適に活動できるような環境を整備していくため、施設利用動向調査の一環として、友の会の会員の基礎データ調査を行った。</p> <p>調査方法：</p> <p>氏名を削除した会員データを友の会より借り受け、そのデータをもとに「会員数」・「年齢分布」・「性別」・「居住地」・「プロジェクト毎の年齢分布・性別」の5つの項目について、データを分析し、結果を図や表にまとめた。</p> <p>結果：</p> <p>1) 会員数の経年変化</p> <p>会員数の経年変化を図1に示した。</p> <p>1988年に設立されて以来、1993年度まで会員数は増加傾向にある。その後1993年度の439名をピークに、1996年度までは400名のラインを前後する安定傾向を示している。</p> <p>2) 会員の年齢分布と男女数</p> <p>会員の年齢分布と男女の数は図2で示した。</p> <p>年齢分布では50代の会員が最も多く(29.1%)、次に40代(17.5%)が続ぎ、60代が3番目(15.1%)という分布を示している。会員全体に対する男女の割合は、男性が215名で53.1%、女性が190名の46.9%で、やや男性が多い。また、年齢と男女を併せて年齢分布を見ると、50代の女性が最も多く、次に50代男性、60代男性の順になっている。年代毎に見て、女性が男性を上回る世代は、20代・30代・40代・50</p>		

代で、逆に男性が女性を上回るのは、0～9才・60代・70代で、10代は男女の数が等しかった。

3) 会員の居住地

会員の居住地の集計を表1、また図3に示した。

居住地で最も高い割合を示したのは「近隣四区」の62.0%であり、続いて「近隣四区以外の市内」が23.5%、「横浜市外の県内」が10.1%、最後が「県外」の4.4%の順であった。なお「近隣四区」では、施設が設置されている栄区が最も多く（全体の22.5%）、次に金沢区・港南区・磯子区の順で会員が分布していた。

4) プロジェクト毎の年齢分布と男女の登録者数

プロジェクト毎の年齢分布と男女の登録者数は、表2で示した。

プロジェクト活動に登録している会員の数は200名で、友の会会員全体の内、登録者はほぼ半数（49.9%）であった。また男女別では、男性の登録者が97名（48.5%）であったのに対し、女性は103名（51.5%）で、やや女性の方がプロジェクト活動に参加している数が多かった。

また、プロジェクトの内、最も登録者が多かったのは、「雑木林ファンクラブ」の66名で、「森の案内人ハンミョウの会」の41名がそれに続いた。

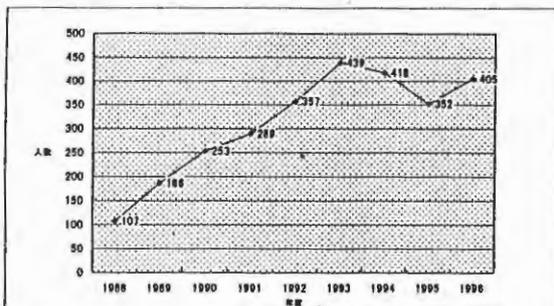


図1 会員数の経年変化

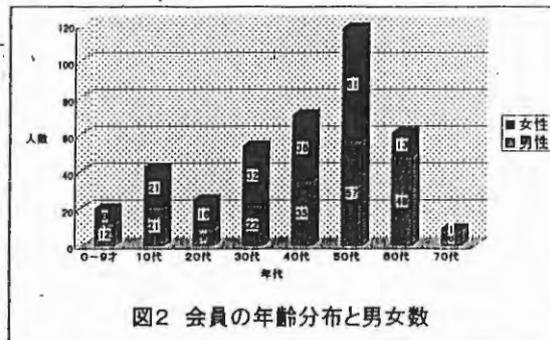


図2 会員の年齢分布と男女数

表1 会員の居住地の集計

居住地	会員		男性		女性	
	数	%	数	%	数	%
栄区	91	22.5%	47		44	
金沢区	73	18.0%	35		38	
港南区	49	12.1%	30		19	
蓮子区	38	9.4%	22		16	
近隣四区の総数	251	62.0%	134	33.1%	117	28.9%
鶴見区	5	1.2%	2		3	
神奈川区	16	4.0%	9		7	
西区	1	0.2%	0		1	
中区	7	1.7%	3		4	
南区	9	2.2%	3		6	
保土ヶ谷区	6	1.5%	3		3	
旭区	4	1.0%	3		1	
港北区	13	3.2%	8		5	
緑区	2	0.5%	1		1	
青葉区	3	0.7%	2		1	
都筑区	0	0.0%	0		0	
戸塚区	22	5.4%	11		11	
泉区	2	0.5%	1		1	
瀬谷区	5	1.2%	4		1	
近隣四区以外の市内の総数	95	23.5%	50	12.3%	45	11.1%
藤沢市	11	2.7%	5		6	
横浜真市	11	2.7%	8		3	
鎌倉市	6	1.5%	3		3	
川崎市	3	0.7%	1		2	
蓮子市	3	0.7%	3		0	
三浦郡	2	0.5%	1		1	
大和市	2	0.5%	2		0	
相模原市	1	0.2%	1		0	
厚木市	1	0.2%	1		0	
中野	1	0.2%	1		0	
横浜市外の県内の総数	41	10.1%	26	6.4%	15	3.7%
東京都	9	2.2%	2		7	
栃木県	4	1.0%	1		3	
長野県	2	0.5%	1		1	
福島県	1	0.2%	0		1	
宮城県	1	0.2%	1		0	
北海道	1	0.2%	0		1	
県外の総数	18	4.4%	5		13	
合計	405	100.0%	215	53.1%	190	46.9%

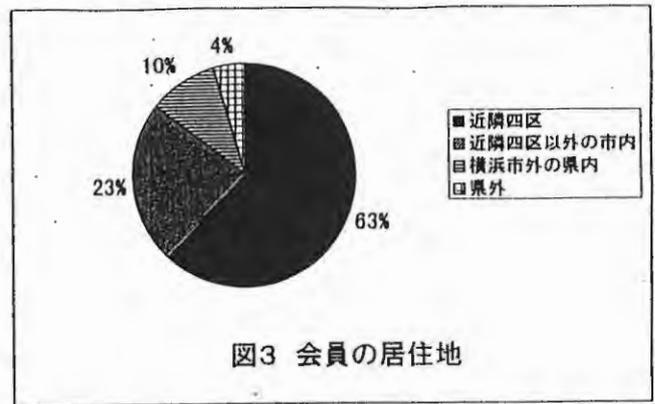


表2 プロジェクトにおける登録者の年齢分布 (男女別)

	0-9才	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不明	合計
PJ-AQUA				2(2:0)						2(2:0)
PJ-イカダイク			3(1:2)		1(1:0)					4(2:2)
オシドリ会					2(1:1)					2(1:1)
こどもプロジェクト	11(5:6)	14(5:9)	5(2:3)							30(12:18)
PJ-STRIX			2(1:1)	4(3:1)	2(1:1)	3(1:2)	2(2:0)			13(8:5)
雑木林ファンクラブ			5(4:1)	3(0:3)	14(6:8)	27(17:10)	14(12:2)	3(2:1)		66(42:24)
畑プロジェクト			1(1:0)	2(0:2)		1(0:1)	1(1:0)			5(2:3)
森の家内人ハンミョウの会			10(2:8)	9(3:6)	12(3:9)	7(2:5)	3(2:1)			41(12:29)
*森を歩こう			9(2:7)	8(2:6)	5(3:2)	3(2:1)				25(9:16)
*自然と遊ぼう			1(0:1)	1(1:0)	2(0:2)	1(0:1)	2(2:0)			7(3:4)
*絵本づくり					5(0:5)	3(0:3)	1(0:1)			9(0:9)
森を描く会			3(0:3)		2(0:2)	14(4:10)	4(1:3)	1(1:0)	1	25(6:18)
カワセミファンクラブ				2(2:0)	4(4:0)	5(4:1)	1(1:0)			12(11:1)
合計	11(5:6)	14(5:9)	29(11:18)	22(10:12)	37(16:21)	57(28:29)	25(19:6)	4(3:1)	1	200(97:102)

登録者数(男性:女性) 単位:人